

# 薩摩川内市の古道跡（予察）

東 和 幸

## 1. はじめに

数年前のことであるが、薩摩川内市の九州電力川内原子力発電所展示館内に展示されている、航空写真に目を奪われたことがあった。東側上空から薩摩川内市街地を写したものであるが、水田の直線道路と台地上の家並みおよび畑の並びが気になったのである。平成22年1月、ようやくこの地点に立つことができ、その周辺を踏査してみると偶然にも延長上に切り通し状の小さな谷があり、古い道跡があるのではないかと思ったのである。

本稿は、これらの状況を紹介すると共に、今後の試掘調査に向けて、直線状の道跡の存在を予察するものである。



薩摩川内市航空写真

## 2. 薩摩川内市の直線道痕跡

今回、現地踏査で確認できた道の痕跡は、以下の10ヶ所である。第1図において印を付けた地点であり、東側から順に紹介する。

### (1) 赤坂橋西側地点

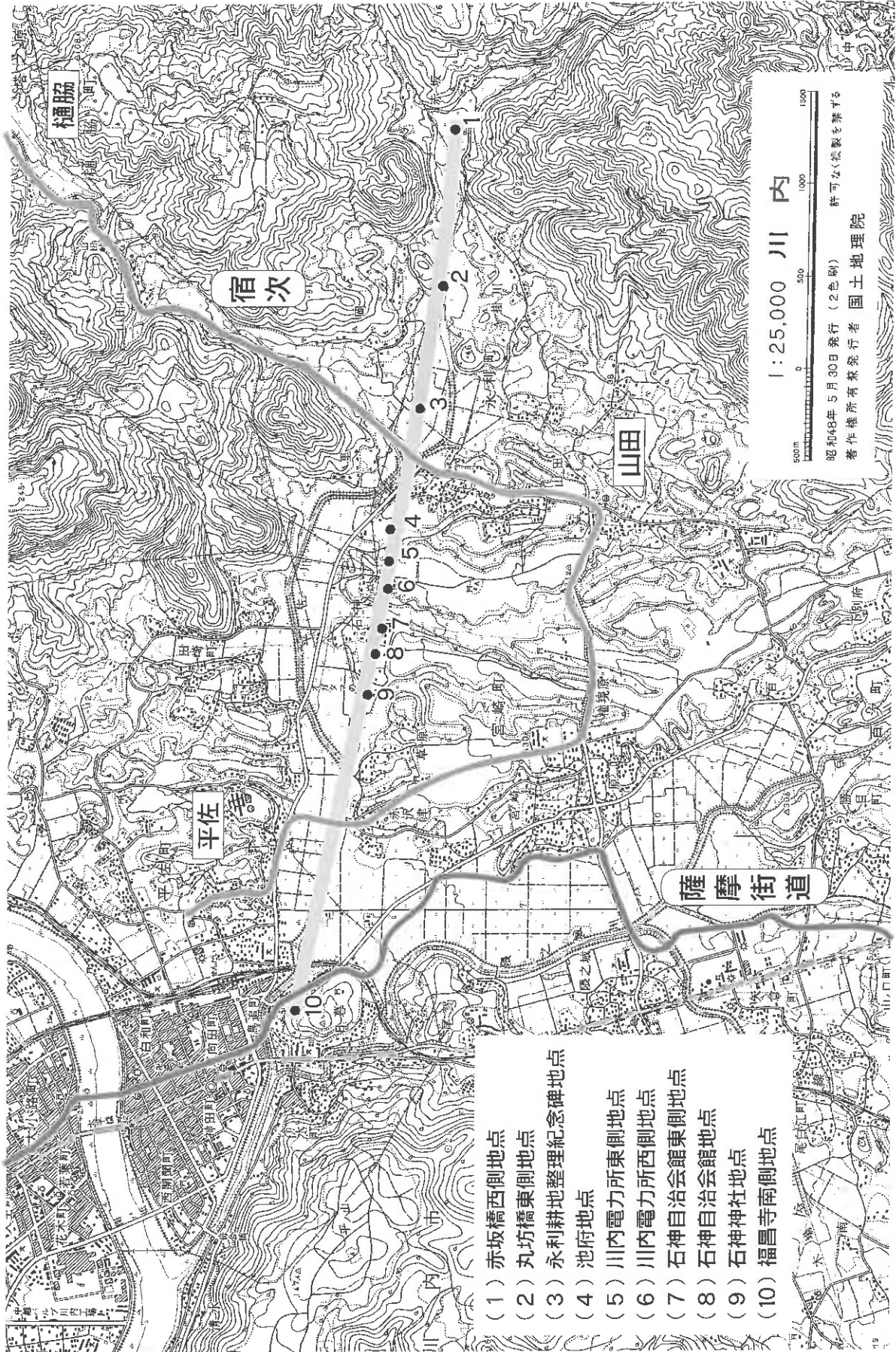
赤坂集落のある丘陵裾部の北端に、切り落とされた部分がみられる。東西方向に高さ約6mの壁面が、長さ約140mに渡って認められる。北側は土手状となり平佐川に面しており、ここでの幅は約10mである。

### (2) 丸坊橋東側地点

比高差11mの台地および標高54.6mの丘陵が北側から延びているが、この地点で250mに渡って直線状の壁面がみられる。平佐川との間が道跡と考えられ、丸坊橋近くには細長い水田が存在する。

### (3) 永利耕地整理記念碑地点

明治35年の地図に直線的な水路がみられ、これに沿った道が270mに渡って現在も踏襲されている。昭和40年代の航空写真では、この道路の南側では耕地整理が進んでいるが、北側では自然地形を残している。このラインが後世の区画方向の基準となったと考えられる。耕地整理記念碑が建つ場所から東側を望むと、山の稜線の一番低い部分に向かっており、路線を選定する際の計画性が窺える。



- (1) 赤坂橋西側地点
- (2) 丸坊橋東側地点
- (3) 永利耕地整理記念碑地点
- (4) 池府地点
- (5) 川内電力所東側地点
- (6) 川内電力所西側地点
- (7) 石神自治会館東側地点
- (8) 石神自治会館地点
- (9) 石神社地点
- (10) 福昌寺南側地点

第1図 薩摩川内市平佐川流域にみられる古道痕跡



(1) 赤坂橋西側地点



(2) 丸坊橋東側地点



(3) 永利耕地整理記念碑地点



(5) 川内電力所東側地点



(7) 石神自治会館東側地点



(8) 石神自治会館地点



(9) 石神神社地点 (オガタマノキ)



(10) 福昌寺南側地点

(4) 池府地点

幅10mで東西方向に40m延びる畑があり、その西側にも同一方向に延びる里道がみられる。

この一画が試掘調査を希望する地点であり、現在発掘調査の手続きを進めているところである。

(5) 川内電力所東側地点

比高差12mの台地に登る坂道があり、幅10m、長さ50mの切り通し状になっている。

(6) 川内電力所西側地点

想定する路線上とは20m程南にあり、現在はコンクリート擁壁がつくられているが、地元の人に伺うと昭和20年頃までは通ることができたという。

(7) 石神自治会館東側地点

比高差11.5mの台地に登る切り通し状の空間がみられる。この北側にもL字形の堀切がみられるが、中世山城である石神城跡に伴う空堀と考えられる。

(8) 石神自治会館地点

石神自治会館の北隣に長さ80m、幅9mの細長い畑が2列あり、土師器片が散布している。また、自治会館が建つ並びも細長い区画である。なお、100m（一町）ほど南側に平行した堀切がみられるが、これは中世山城である石神城跡に伴う空堀であるとされる。

(9) 石神神社地点

石神神社の西側の地形が不自然であり、台地と平野の境が東西方向に直線的に延びている。石神神社は一説に寛元年間（1243～1247年）とあるものの、寛永年間（1624～1644年）の創建と言われている。境内に天然記念物指定「永利のオガタマノキ」があり、根回り10.9mで、樹齢は1,000年とも800年とも言われている。オガタマノキはモクレン科の常緑高木で、樹皮や葉・花に芳香があることから大師香とも呼ばれ、和名のオガタマとは「招魂（おきたま）」から転訛したものといわれ玉串として用いられる。神社の由緒と樹木の古さ以外に確たる根拠はないが、少なくともこの場所が数百年はさかのぼれると推察される。

(10) 福昌寺南側地点

巢山もしくは日暮丘と呼ばれる標高約45mの独立丘陵北端の裾部に、切り通し状の坂がある。登り切った場所からは、薩摩川内市街地が一望できる。

## 小結

以上の各地点は直線上にあり、おおよそ東西に延びている。また、(9)石神神社地点と(10)福昌寺南側地点の間と日暮丘の西側は、平佐川が改修され道跡推定地と一直線上になっている。これらの道跡推定地は、現在の磁北に合わせた東西線よりも、東側は南に12度ずれている。また、幅9mの畑や幅10mを越える切り通しがあることから、9m幅程度の道が想定される。東端については、山地が険しくなる赤坂集落下までと考えられる。

では、道跡の西端はどこだろうか。「卷之十一 薩摩国薩摩郡隈之城千台川」『三国名勝図会』（1843年）には、「此川当郷東手向田の坊口<sup>マテグチ</sup>に舟渡し場あり、九州路の大道なり、故に往来絡繹として、舟渡のもの絶えず」とある。しかし、現在の所「坊口」を特定するには至っていない。なお、小字には大小路の西端に「渡瀬口」があり、この辺りから北に向かったところに薩摩国府の比定地

が位置する。したがって、川内川を渡る地点から南へ延ばした場所まで、東からの直線道路が存在したと想定できる。このように考えると、東西方向に最大で5,500mもの直線道が復元され、起伏に富む複雑な地形が多い薩摩国にあっては、壮観な道であったことが推察される。

時期については、江戸時代に藩庁から外城（郷）へ諸令達や廻文などを順々に次渡する宿次は、郡山筋として入来→樋脇→山田→平佐が設定されており、薩摩街道の出水筋（高井1993）とも異なることから、江戸時代以前にさかのぼることが考えられる。いずれにしても、道であるかどうかや時期を確認するためには、発掘調査やボーリングステッキを用いた調査、あるいは地下レーダー探査など考古学的手法による調査が必要となる。

### 3. 薩摩国・大隅国古代道の研究史

鹿児島における古い道の研究は、旧石器時代にさかのぼる指宿市水迫遺跡や鹿児島市仁田尾町仁田尾遺跡をはじめとする、発掘調査成果によるものも多いが、ここでは古代の道についてみてみたい。薩摩国と大隅国における道跡を考える上で、基本となる記述は次の二編である。

一つは、延長5（927）年に完成した『延喜式』（卷二八）兵部省諸国伝馬の

「大隅国駅馬 蒲生。大水 各五疋。

薩摩国駅馬 市来。英祢。網津。田後。櫛野。高来 各5疋。

伝馬 市来。英祢。網津。田後駅各五疋。」であり、大隅国と薩摩国にこれらの駅家があったことがわかる。

もう一つが、延暦23（804）年の『日本紀延暦二三年三月』にある

「大宰府言。大隅国桑原郡蒲生駅與薩摩国薩摩郡田尻駅相去遙遠通送艱苦。伏望置駅 於薩摩郡櫛野村以息民苦許之。」であり、蒲生駅と田尻駅の間に櫛野駅が置かれたことがわかる。

次に、先学による鹿児島における古代の道や駅家についての見解は下記のとおりであり、覚書として記すこととする。

吉田東伍（吉田1900）

- ・大隅国大水駅については、菱刈郡大水郷のことを「延喜式大隅国駅名にも大水あれば、其肥後仁王、もしくは日向真析（真幸）の通路にあたるや必然とす」と述べる。
- ・大隅国蒲生駅については、始良市蒲生町に比定している。
- ・薩摩国櫛野駅は、樋脇とする。
- ・薩摩国市来駅は、「米之津などの旧名にや」と述べる。
- ・薩摩国網津駅は、薩摩川内市網津に比定している。
- ・薩摩国田後駅については、「平佐の地なるべしとも想はる」と述べる。

黑板勝美（黑板1919）

- ・延暦22（803）年初見の駅には、大隅国蒲生駅と薩摩国田尻駅・櫛野駅がある。
- ・大隅国大水駅を、真研駅および島津駅と大隅国府の間の二通りに求めている。
- ・大隅国の蒲生駅は、「今の蒲生の地であった事は察するに難くない」と述べている。
- ・「櫛野は『九条公爵家本延喜式』にイチヒノと訓じているから」、薩摩郡の市比野に比定してい

る。

- ・田尻駅は、「櫛野と国府との中間であろうから」、薩摩川内市平佐から永利の辺りに比定している。
- ・高来駅は、国府のあった高城に比定している。
- ・網津は『九条公爵家本延喜式』にオウツとあることから、現在の網津付近から京泊の辺りにあり、「水陸の要衝であった」としている。
- ・薩摩国英祢駅を、中世の莫祢院が置かれた阿久根に比定している。
- ・市来駅を、出水市米ノ津辺りに比定している。

#### 藤井重寿 (藤井1975)

- ・薩摩国田尻駅は国府から近すぎるので、薩摩川内市樋脇町内に求めている。
- ・櫛野駅は、新留峠の薩摩川内市入来町側にある市野野に比定している。

#### 渡辺正気・亀井明德 (池畑1991)

昭和53(1978)年に、市来駅を出水市武本の小字「市来」および馬差場・駄子田・牧野の地名から、この地に比定している。

#### 藤岡謙二郎 (藤岡1979)

- ・大隅国の蒲生駅は、「蒲生の町をあてるべきだろう。」と述べる。
- ・大隅国の大水駅は、「東では財部町、西では加治木町が候補にあがるが、これらについてもなお将来の調査を待ちたい。」と述べる。
- ・薩摩国の市来駅は、JRの「出水駅付近に比定すべきであろう。」と述べる。
- ・薩摩国の英祢駅は、阿久根市「脇本の臨海地区とせねばならないであろう。おそらく西の海上に浮かぶ甌列島へはこの駅から渡ったのでであろう。」と述べる。
- ・薩摩国の網津駅は、薩摩川内市網津町をあて、川内川河口にあり薩摩国府の外港を兼ねていたと指摘している。
- ・薩摩国の田尻駅は、「薩摩国府内か、又はこれに接して存在したものとする。」と述べる。
- ・薩摩国の高来駅は、「市比野、鹿児島間の中間にあたる郡山町をいまかりに高来駅と考えても、さほど不自然でもないように考える」と述べる。

#### 木下良 (木下1982)

- ・田後駅を薩摩国府付近に比定している。
- ・高来駅を櫛野駅と大水駅の間、および鹿児島市郡山町付近に想定している。

#### 池畑耕一 (池畑1991)

- ・英祢駅を、焼塩壺の出土から阿久根市波留字辻堂に比定している。

#### 小園公雄 (小園1992)

・『平家物語』長門本にある「島津駅→夏影(夏木)→あかさか(赤坂)→とかみ(止上)→けしきの森」をもって、大隅国大水駅を曾於市財部町大川原に比定している。

#### 武久義彦 (武久1992・1994)

- ・地形図と航空写真から、始良市始良町船津の道跡を指摘している。
- ・大隅国大水駅を、大隅国府から北上し日向肥後路の分岐点付近となる伊佐市菱刈町前目付近に求

めている。

**木本雅康**（木本1977）

- ・薩摩国－肥後国間の伝馬路を海岸線沿いに、駅路を出水市矢筈岳の東側を通るルートを設定している。

**平田信芳**（平田2003・2009）

- ・大隅国府から肥後日向路を結ぶルートを、①1132（天承2）年に記された『石清水文書』にある「往古大路字宮坂麓の石躰に八幡の御名顕現」から、②「横大道・南十三塚・十三塚・入道・大道添・大道」の小字から、③実際に踏査して、宮坂麓から十三塚を通り、溝辺郷旧麓に抜ける道を想定している。
- ・大隅国大水駅を、①川内川の渡し船が官渡で「下木場渡」と「下殿渡」の2箇所であること、②「曾木郷里」地名があること、③大峰遺跡があること、から菱刈郡大水郷に比定している。
- ・大隅国から日向国への道は、いろいろなルートが考えられるとしている。
- ・大隅国と薩摩国を結ぶルートを、①八幡社の分布から、②河口付近は川幅が広くて渡りにくいことから、薩摩国府（新田八幡）－塔之原（若宮八幡）－蒲生（正八幡若宮）－鍋倉（新正八幡）－木田（弓箭八幡）－高井田（高倉八幡）－内（大隅正八幡）－大隅国府（府中）としている。
- ・大隅国と薩摩国境は、新留峠ルートを指摘している。
- ・大隅国と北回りで日向国を結ぶルートを、八幡社の分布から、大隅国府（府中）－内（大隅正八幡）－万膳（八幡神社）－米永（正若宮八幡）－川西（箱崎八幡）－鶴丸（八幡神社）－日向国としている。
- ・大隅国と肥後国を結ぶルートを、八幡社の分布から、大隅国府（府中）－内（大隅正八幡）－万膳（八幡神社）－米永（正若宮八幡）－市山（箱崎八幡）－目丸（西原八幡）－大田（郡山八幡）－山野（八幡神社）－肥後国としている。
- ・薩摩国の英祢駅を、中世の莫祢城（阿久根城）があった阿久根市山下に比定している。
- ・薩摩国と肥後国を結ぶルートについて、横座峠がバイパスとして使われていたとする。
- ・薩摩国市来駅は、日置市市来にあったと想定している。

**永山修一**（永山2003・2009）

- ・「厨」墨書土器の出土から、薩摩国各郡におけるルートを想定している。
- ・薩摩－大宰府間の輸送が船を利用していたことを『薩摩国正税帳』から導き出している。
- ・水上交通にも注目しており、薩摩国府・大隅国府の設定に関しては、水運も十分に意識されたことが指摘されている。

**松田朝由・岩澤和徳**（松田・岩澤2004）

曾於市財部町に所在する高篠遺跡出土の官衙的遺物（石帯・墨書土器・焼塩壺）を基に、近くを通る横市川から前田川につながるルートを想定している。また、踏査することによって、島津駅から大隅国府へ至る最短ルートであると指摘している。

**深野信之**（深野2008）

始良市始良町船津にある窪地は武久義彦氏によって官道として指摘されていたが、始良町教育委

員会が城ヶ崎遺跡として発掘調査を実施し、2時期にわたる道跡が確認された。両側に溝を伴うもので、4m幅の道跡が74mにわたり検出された。少なくとも8世紀には第Ⅰ期官道がつくられ、11世紀には維持管理が及ばなくなった状況が指摘されている。周辺には柳ガ迫遺跡や外園遺跡があり、蒲生駅跡が近くに存在する可能性も指摘されている。柳ガ迫遺跡では礎石をもつ掘立柱やV字状の溝の他、多くの墨書土器や155点の刻書土器、2点の石帯、須恵器や越州窯青磁・湖南省長沙窯産「黄釉褐彩貼花文水注」などが出土し、官衛的な性格を帯びている。発掘調査によって、鹿児島県内の古代官道が明らかになった例は唯一であり、平成23年度の報告書刊行が待たれる。

なお、大隅国府から薩摩国府に通じるルートについては、始良市加治木町高井田遺跡や始良市始良町島津義弘居館跡南側の山際を想定している。(深野信之氏談)

#### 関一之

始良市加治木町内で官道跡と考えられるのが、網掛川を渡る地点から考えると河口付近ではなく、江戸時代の絵地図にある加治木中学校近くの「歩渡」であり、湯湾岳の北側を通って鍋倉に抜けると想定している。(関一之氏談)

**発掘調査により古代の道跡が検出された遺跡** (文献は省略。溝状遺構を除く。)

指宿市橋牟礼川遺跡 指宿市敷領遺跡 南九州市穎娃町城ヶ崎遺跡 南九州市川辺町堂園遺跡A地点 南九州市川辺町堂園遺跡B地点 南さつま市加世田上加世田遺跡 南さつま市金峰町神原遺跡 日置市東市来町市ノ原遺跡第3地点 薩摩川内市中福良町西ノ平遺跡 さつま町犬木屋遺跡 出水市大坪遺跡 始良市始良町城ヶ崎遺跡 始良市始良町中原遺跡 始良市蒲生町藤坂・禁中遺跡 始良市加治木町干迫遺跡 湧水町山崎A遺跡 霧島市隼人町入道遺跡 霧島市福山町中尾立遺跡 曾於市財部町財部城ヶ尾遺跡 曾於市財部町高篠遺跡 曾於市財部町踊場遺跡 曾於市財部町九養岡遺跡 曾於市末吉町関山西遺跡 曾於市末吉町桐木耳取遺跡 曾於市末吉町原村Ⅰ遺跡 志布志市有明町松ヶ尾遺跡 鹿屋市吾平町中尾遺跡 鹿屋市輝北町堂原遺跡 鹿屋市輝北町鳥居ヶ段遺跡 鹿屋市郷之原町榎崎A遺跡 鹿屋市郷之原町榎崎B遺跡 鹿屋市花岡町宇都上遺跡

#### 4. まとめ

以上みてきたように、薩摩国と大隅国における古代の官道や駅家に関しては諸説あるものの、確実な例は始良市始良町城ヶ崎遺跡の道だけであり、今後これらの想定される場所の考古学的手法による確認が必要である。駅家については官道を明らかにすることによって、その線上に見いだすことが遠回りのようでも近道であると考ええる。

今回指摘した薩摩川内市における古道については、古地図・航空写真・里道(赤線)・現地踏査により、略東西方向に最大5,500mの直線道路が存在すると考えられる。時期については、江戸時代に使われた街道や宿次と位置や方向性が異なることから、江戸時代以前にさかのぼるものと考えられる。しかし、ここまでは推察の域を出ないものであり、今後、発掘調査等の考古学的手法により古道が存在することの確認を得るとともに、もし存在すれば、その時期や性格を特定する必要がある。

なお、下記の方々にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。(敬称略)

上床真・木本雅康・永山修一・富永辰昭・中島哲郎・平田信芳・深野信之・藤井法博



## 文献

- 池畑耕一 1991 「英祿駅考」『交流の考古学』肥後考古8号 熊本県考古学会
- 木下 良 1982 『日本歴史地図 原始・古代編(下)』 柏書房
- 木本雅康 1977 「古代伝路の復元と問題点」『古代交通研究』第7号
- 黒板勝美 1919 『鹿児島県史』第1巻 鹿児島県
- 小園公雄 1992 「大隅国府と日向国府との古代官道について」『鹿大史学』第39号
- 高井熊次郎 1993 『歴史の道調査報告書第1集 出水筋』鹿児島県教育委員会
- 武久義彦 1992 「明治期の地形図にみる大隅国の駅路と蒲生駅家」『奈良女子大学地理学研究報告』IV
- 武久義彦 1994 「明治期の地形図にみる大隅国北部の駅路と大水駅」『奈良女子大学研究年報』第38号
- 永山修一 2003 「南九州の古代交通」『古代交通研究』第12号 古代交通研究会
- 永山修一 2009 『隼人と古代日本』 同成社
- 平田信芳 2003 「古道を探る方法」『中原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書64 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 平田信芳 2009 「大隅・薩摩の古代官道」『地名研究会報』第108号 鹿児島地名研究会
- 深野信之 2008 「鹿児島県始良町における古代遺跡の調査 ―始良町船津城ヶ崎・柳ガ迫(大坪)遺跡を中心に―」平成19年度西海道古代官衙研究会レジュメ
- 藤井重寿 1975 「第三編 古代前期国家成長期の川内」『川内市史 上巻』川内市
- 藤岡謙二郎 1979 『古代日本の交通路IV』大明堂
- 松田朝由・岩澤和徳 2004 「第3節 高篠遺跡の特質と歴史的な位置づけ」『九曜岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書71 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 吉田東伍 1900 『大日本地名辞書』

**追記** 1. (4)池府地点について、発掘調査を計画し、平成22年5月1日～5月5日および平成22年8月7日～8月10日に申請したが、許可されなかった。

2. (1)赤坂橋西側地点から「櫟野」への道については、現在確認されている官道である城ヶ崎遺跡までの最短ルートを想定しておく必要がある。「櫟野」が現在の市比野であることを前提とすれば、市比野から川内市街地へ抜けるルートとして、沢牟田集落と尾原集落を通る道を戦後しばらくまで利用していることを聞き取ることができた。

なお、このルートの延長上である向陽集落の笹原辻付近に「櫟野(市比野)駅」(昭和50年9月 町指定文化財)の標柱があるが、旧樋脇町教育委員会がどのような様子でこの場所を比定したのか、今後調べる必要がある。

